



AK13030 北村 祥浩

杜への畏敬は時を超える

— Pray, Meditate, — Religion mutual understanding —

Keywords

明治神宮 表参道 宗教相互理解
国際化 AR 東京オリンピック

1. はじめに

宗教が関与した紛争、ISによるテロは、情報化・国際化も相まって、昨今急増している。そんな今だからこそ、自らが信仰するしなに関わらず他の宗教に関心を持ち、宗教の相互理解を助ける建築は世界中で求められている。

2020年の夏季五輪開催地である東京は、海外の都市と比較すると宗教への関心は著しく低い。62%の日本人に信仰はなく、東京はそれを上回る。しかしながら日本人の多くが神社仏閣に参拝し、人智を超えた存在を畏れ敬う気持ちがあることも事実だ。

2. 研究背景

宗教の相互理解のための建築空間は、特定の宗教の空間だけでなければ、どこにでもあり得るような瞑想空間だけでもいけない。自らの価値観・宗教観を認識しつつ、他の価値観・宗教観も体験し、そして同じ方向を向ける、そんな連続した空間体験が求められる。

2.1 AR・技術と真理の融合

それぞれの宗教観を知ってもらうための装置として、ARが有効だと提唱したい。宗教と先端IT技術は、ともにカタチがなく現実には目に見えない点、動機を重んじる点、ハードではなくソフトである点において共通する。もちろん、人が立ち入れないような宗教性高き空間をインターネットで表現するのは御法度だが、例えば鳥居やイスラム教が尊ぶメッカの方向性といった導入部なら表現できるだろう。コーリン・ロウは「透明性」において、美学者G・ケペッシュの言葉を引用し「透明性とは、空間的に別のところにあるものを同時に認識すること」と論じた。透明性とは目に見える世界だけのものではなく、むしろ目に見えない世界にこそ本質があるということだ。昨今このことが軽視され、精神性の欠如としかいえない状況にある。目に見えない真理を人々に表現するために宗教や真理に基づいた建築が建てられてきたことは時代が変わっても忘れてはならない。その意味でも、先端技術と真理を両立させた建築の提案が必要だと考える。

2.2 神道の杜・都市に宗教建築を

続いて、個々の宗教観を知った後の全体が向く方向性について論じる。日本で考えられるものとしては、神道の杜への畏敬の念が挙げられるだろう。日本人は無信仰

といいつつも、万物に神が宿る神道の思想を長らく受け継いできた。杜や、杜に向かう道の方角を見せることなら、あらゆる宗教の人にも受け入れられる。また、「杜への畏敬の念」は、緑の木々を通して杜から並木道にも続いていく。建築単体に留まらず周辺の環境や都市に影響を与える。都市に必要な要素となることが、社会から切り離されない宗教相互理解のための建築に求められる。

3. 研究目的

東京五輪に間に合わせられると仮定した上で、日本らしさを発信しつつも海外の良さも取り入れる宗教相互理解の建築を提案する。ARを用い、五輪に影響を与える立地にある明治神宮の杜に着目する。港区による「青山通り周辺地区まちづくりガイドライン」を参考にする。

4. 対象敷地

用途地域：商業地域

建坪率：80% 容積率：700%



写真1 対象敷地 (Yahoo!地図より)

4.1 敷地概要

港区南青山三丁目、およそ1kmの表参道の大通りのスタート点であり、青山通りと交わる地下鉄表参道駅の地上東側を対象敷地とする。表参道と青山通りの交差点は、2020年の東京五輪で間違いなく重要な場所になる。現在建設中の新国立競技場は、神宮外苑と隣接している。神宮の杜といかに調和できるかということがコンペの大きなテーマとなったように、神宮の杜は五輪では一層存在感を増すだろう。また、ITベンチャーの街である渋谷は現在、大規模な再開発が現在進められており、五輪では劇的に変わった姿を見せることになる。さらに、明治神宮や代々木競技場からまっすぐ伸びる表参道は明治神宮の参道であることから、外苑と渋谷を結ぶ青山通りと表

参道の交差点はまさに先端技術と畏敬の念の結節点であり、新旧の五輪を結ぶ結節点でもある。明治神宮は2020年に鎮座100周年を迎えるにあたり、世界中の人を受け入れる取り組みをしている。敷地付近にはミッション系の教育機関もあれば、神社、寺院も密集している。交差点の地下に改札がある地下鉄を利用すれば、東洋一美しいモスクである東京ジャーミイにもすぐ行くことができるので、宗教相互理解の場所に相応しい。

4.2 敷地分析

敷地のポテンシャルは素晴らしいが、表参道と向かい合う側の雑居ビル街の景観が悪く、圧迫感があり、さらに道の軸線が少しずつずれている。表参道の正面性は失われ、明治神宮から繋がる畏敬の念は分断されている。この軸線のズレを利用した設計を試みる。

ムスリムがメッカの方向を重んじながらも他の価値観を受け入れるにはどうしたらよいか。メッカの方向と少しだけズレる方向に他の宗教にとっての象徴も見せたら受け入れやすいのではないか。敷地からメッカは表参道の中心線から南に7度ずれ、エルサレムは北に3度ずれるのみとなっているので、表参道の大きなビルの隙間から、神宮の方向に加えてメッカとエルサレムの方向が分かる。



写真2 (左) 敷地交差点から西方を見る

写真3 (右) 敷地交差点から東方を見る。



図1 配置図 (軸線のズレが分かる)

5. 設計概要

5.1 プログラム

- ・宗教相互理解を促す展望台と瞑想室
- ・礼拝室・講義室
- ・ITベンチャー企業オフィス・ショールーム
- ・ショップ・カフェ
- ・交流を促すオープンスペース

5.2 設計趣旨

(1) 幾何学の積極利用

コルビュジェ本人は『建築へ』において「建築は優れた芸術であり、比例の取れた関係によってプラトンの偉大さ、数的秩序、調和の思考と知覚という状態に達する」と述べた。精神的なるものは美しく、美しいものは幾何学的精神の表れという考えを私たちが大切にしたい。白銀比の日本らしい空間から、黄金比の西洋らしい空間への移行を、ファサードで表す。神宮方向から建物を見上げると日本のためだけの建築ではないと分かる。

(2) ARも利用する、「それぞれの方向へ」

敷地に建つハードの建築に加えて、ARの大鳥居を設計する。ハードだけでも宗教性を伝えたいが、ハードは必要最低限にしかねない。ソフトによって絶えずアップデートされていく。そしてソフトはあくまでも目に見えない世界を思い起こすためにある。ハード+ソフトのもたらす影響力は、この敷地に収まらず、IT社会だからこそ、流行の先端地を表参道から世界中に広まる。この建築で示すのは、世の中の進むべき方向性でもある。

(3) ARなしで伝える、「同じ方向へ」

門の上層階から神宮方向を見下ろすと、参道が強調される。ARの大鳥居の下から、僅かにズレて神宮と共にメッカ、エルサレムが見える、そのARの空間から移行して、最後はARなしの瞑想空間へと向かう。ここで見えるのは表参道の並木道と、かすかに見える神宮の杜である。シンプルに杜への畏敬の念を抱かせる。全ての宗教が同じ方向を向いたとき、人類は一つになれる。



写真4 敷地上空からの眺望 (写真提供：明治神宮)

参考文献

- 1) コーリン・ロウ著 伊東豊雄・松永安光訳『ミニエリスムと近代建築』
- 2) ル・コルビュジェ著 樋口清訳『建築へ』
- 3) ケヴィン・ケリー著 服部桂訳『〈インターネット〉の次に来るもの-未来を決める12の法則』
- 4) 磯崎新著『建築における日本的なもの』
- 5) 青山通り周辺地区まちづくりガイドライン
<https://www.city.minato.tokyo.jp/matizukurikeikakutan/documents/aoyamagaidoraingaiyou.pdf>



For world peace, we should do mutual understanding of the religion.

